

俊寛

一名 鬼界島

世阿弥作

ワキ

赦免の使

ツレ

丹波少将成経

ツレ

平判官入道康頼

シテ

俊寛僧都

地は

薩摩

季は

雑

ワキ詞

「是は相国に仕へ申す者にて候。さても此度中宮御産の御祈りの為めに。非常の大赦行はるゝにより。国々の流人赦免ある。中にも鬼界が島の流人の内。丹波の少将成経。平判官康頼二人赦免の御使をば。某承つて候ふ間。唯今鬼界が島へと急ぎ候。

2

成経康頼次第

「神を硫黄が島なれば。く。願ひも三つの山ならん。

サシ

「是は九州薩摩湯。鬼界が島の流人の内。

成経

「丹波の少将成経。

康頼

「平判官入道康頼。

二人

「二人が果にて候ふなり。われら都にありし時。熊

野参詣三十三度の。歩みをなさんと立願せしに。

其半にも数足らで。かゝる遠流の身となれば。所願も空しく早なりぬ。せめての事の余りにや。此

島に三熊野を勧請申し。都よりの道中の。九十九

処の王子まで。

3

下歌「ことづく順礼の。神路に幣を捧げつゝ。

上歌「こゝとても。同じ宮居と三熊野の。く。浦の浜
木綿ひとへなる。麻衣のしをるゝを。只其まゝの
白衣にて。真砂を取りて散米に。白木綿花の御祓
して。神に歩みを運ぶなり。く。

シテ一声「後の世を。待たで鬼界が島守と。

地「なる身の果の闇きより。

シテ「闇き道にぞ入りにける。

サシ「玉兔昼眠る雲母の地。金鶏夜宿す不萌の枝。寒蟬
枯木を抱きて。鳴き尽して頭をめぐらさず。俊寛
が身の上に知られて候。

康頼詞「あれなるは俊寛にてわたり候ふか。是までは何の
為めの御出でにて候ふぞ。

シテ詞「早くも御覧じとがめたり。道迎の其為めに。酒を
持ちて参りて候。

康頼「そも一酒とは竹葉の。此島にあるべきかと立ち寄

り見れば。や。是は水なり。

シテ「是は仰せにて候へども。それ酒と申す事は。もと
是れ薬の水なれば。れい酒にてなど無かるべき。

康頼成経「げにくは理なり。頃は長月。

シテ「時は重陽。

康頼成経「所は山路。

シテ「谷水の。

三人「彭祖が七百歳を経しも。心を汲み得し深谷の水。

地「飲むからに。げにも薬と菊水の。く。心の底も
白衣の。ぬれてほす。山路の菊の露のまに。我も
千年をふる心地する。配所はさてもいつまでぞ。

春すぎ夏たけて又。秋暮れ冬の来るをも。草木
の色ぞ知らするや。あら恋しの昔や。思ひでは何
につけても。あはれ都にありし時は。法勝寺法成
寺。たゞ喜見城の春の花。今はいつしか引きかへ
て。五衰滅色の秋なれや。落つる木の葉の盃。の

む酒は谷水の。流るゝも又涙川。水上は我なる物を。物思ふ時しもは。今こそ限なりけれ。

ワキ一声「早船の。心にかなふ追風にて。舟子やいとゞ勇むらん。

詞「いかに此島に流され人の御座候ふか。都より赦免状を持ちて参りて候。急いで御拝見候へ。

シテ詞「あら有難や候。やがて康頼御覧候へ。

康頼「何々中宮御産の御祈りの為に。非常の大赦行はるゝ

により。国々の流人赦免ある。中にも鬼界が島の流人の内。丹波の少将成経。平判官入道康頼二人赦免ある所なり。

シテ「何とて俊寛をば読み落とし給ふぞ。

康頼「御名はあらばこそ。赦免状の面を御覧候へ。

シテ「さては筆者のあやまりか。

ワキ「いや某都にて承り候ふも。康頼成経二人は御供申せ。俊寛一人をば此島に残し申せとの御事にて候。

シテ「こはいかに罪も同じ罪。配所も同じ配所。非常も同じ大赦なるに。一人誓ひの網に漏れて。沈み果てなん事は如何に。

クドキ「此ほどは三人一処に有りつるだに。さも恐ろしく冷ましき。荒磯島にたゞ一人。離れて海士の捨草の。波の藻屑のよるべもなくて。あられん物か浅ましや。歎くにかひも渚の千鳥。泣くばかりなる有様かな。

クセ「時を感じては。花も涙をそゞぎ。別れを恨みては。鳥も心を動かせり。もとよりも此島は。鬼界が島と聞くなれば。鬼ある所にて。今生よりの冥途なり。たとひ如何なる鬼なりと。此あはれなどか知らざらん。天地を動かし。鬼神も感をなすなるも。人のあはれなる物を。此島の鳥獣も。鳴くは我を弔ふやらん。

シテ「せめて思ひの余りにや。

地「さきに読みたる巻物を。又引き開き同じあとを。繰り返しく。見れどもくたゞ。成経康頼と。書きたる其名ばかりなり。もしも礼紙にやあるらんと。巻きかへして見れども。僧都とも俊寛とも。書ける文字は更になし。こは夢かさても夢ならば。さめよくと現無き。俊寛が有様を。見るこそあはれなりけれ。

ワキ「時刻うつりて叶ふまじ。成経康頼二人は、や。御船に召され候へとよ。

成経康頼「かくてあるべき事ならねば。よその歎きをふりすて。二人は船に乗らんとす。

シテ「僧都も船に乗らんとて。康頼の袂にとりつけば。

ワキ「僧都は船に叶ふまじと。さも荒けなく言ひければ。

シテ「うたてやな公の私といふ事のあれば。せめては向ひの地までなりとも。情に乗せて給ひ給へ。

ワキ「情も知らぬ舟子ども。櫓をふりあげ打たんと

す。

シテ「さすが命の悲しさに。又立ち帰り出船の。

詞「纜に取りつき引きとむる。

ワキ「舟人ともづな押し切つて。船を深みに押し出だす。

シテ「せん方波にゆられながら。たゞ手を合はせて船よ

なふ。

ワキ「船よといへど乗せざれば。

シテ「力及ばず俊寛は。

地「もとの渚にひれふして。松浦佐用姫も。我身には

よも増さじと。声も惜しまず泣き居たり。

三人ロンギ「痛はしの御事や。我等都に上りなば。よきやうに

申し直しつゝ。やがて帰洛はあるべし。御心づよ

く待ち給へ。

シテ「帰洛を待てよとの。呼ばゝる声も幽なる。頼みを

松陰に。音を泣きさして聞きるたり。

三人「聞くやいかにと夕波の。皆声々に俊寛を。

シテ「申し直さば程もなく。

三人「必ず帰洛あるべしや。

シテ「これは誠か。

三人「なか／＼に。

シテ「頼むぞよ頼もしくて。

地「待てよくといふ声も姿も。次第に遠ざかる沖つ

波の。幽なる声絶えて。船影も人影も。消えて

見えずなりにけり。あと消えて見えずなりにけり。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション
『謡曲評釈第八輯』大和田建樹 著